

研究ノート

Ruthに見る「意識」が直接与えるもの

—ヒロイン・ルースを例にして—

大 前 義 幸

はじめに

エリザベス・ギャスケル (Gaskell, Elizabeth. 1831-65) が1853年に出版した長編小説である *Ruth* は、出版当初、触れてはいけない社会問題を取り扱ったため大きな論争を巻き起こした作品である。当時、若い女性が貧困や淫らな快楽のために娼婦となることが多く、そのため娼婦になった女性は社会の大悪というレッテルを貼られ、ヴィクトリア朝の女性の存在に大きな影響を与えたのであった。

この作品に登場するルース・ヒルトン (Ruth Hilton) は、まさにヴィクトリア朝時代の女性にあてはまる零落の女性の一人である。そのため、*Ruth* をはじめ *Mary Barton* (1848) は、多くの研究者たちから社会問題小説として論じられることが多かった。

Ruth 執筆にあたり、ギャスケルが実際の出来事を素材に物語を組み立てたことは、よく知られている。また、ヒロイン・ルースのモデルになっているのは、作者が実際に出会った、パスリ (Pasley) という女性であることは、『ギャスケルの文学』で波多野葉子氏が指摘しているように、今では定説となっている。¹

ギャスケルは、ユニテリアン派の牧師の妻として、マンチェスターで積極的に娼婦の救済活動を行っていた。パスリはアイルランドの牧師の娘であったが、2歳で父を亡くし、母に養育を放棄されたため、14歳でお針子の見習いとして社会に出されたのであった。しかし勤め先の倒産により、その後、その店を引き継いだ婦人が、パスリの病気を診断した外科医に売春を斡旋し、以後、パスリは転落の道を歩むこととなる。これはいわゆる「堕ちた女」(The fallen woman) の典型的なパターンと言ってよいだろう。² 一方、小説 *Ruth* では、ヒロイン・ルースは12歳の頃母を亡くし、15歳になると父を病氣で失うのである。そのため、パスリと同じくお針子の見習いとして、メイソン夫人 (Mrs. Mason) の経営する婦人服を仕立てる店で働く

こととなる。

お針子たちは、ときに上流階級の舞踏会に狩り出されることもあったが、それは貴婦人たちのドレスがほつれたとき、その場でそれを直す役目をするためであった。作中、ルースもこのような舞踏会に初めて連れていかれ、控え室で待機していたところ、ヘンリー・ベリンガム (Henry Bellingham) という貴族の青年と出会うこととなる。

ベリンガムは、小柄でかわいいルースに上流階級の女性にはない魅力を見出し、他方、ルースもハンサムなこの上流階級の青年に身分の違いも忘れて引かれていくのであった。しかし、アーサー・ベリンガムはブレイボーイとして社交界で名をはせていたため、夢にも思わなかつたこの出会いにルースはただ圧倒されるばかりであった。舞踏会の帰り道、たまたま川で溺れそうな子供を助けた事件をきっかけに二人の間に恋愛が生じる。そこで、休日にベリンガムと会うことを約束したルースは、ベリンガムを自分の生家に連れて行くのだが、その帰り道、雇い主のメイソン夫人と偶然出くわし、二人の関係が明らかになる。当時、貴族の青年とお針子が休日を共に過ごすことは、まったく考えることのできない社会常識の一つであった。それゆえ、ルースはメイソン夫人から厳しく叱責され、即座に解雇されてしまうのである。責任を感じたベリンガムは、ルースを連れて新婚旅行を気取った旅へと出ていく。まずは、北ウェールズのある宿で、二人はしばらく過ごすのであったが、やがて、ベリンガムが脳炎にかかるてしまう。急を聞いて駆けつけたアーサーの母、マーガレット・ベリンガム (Margret Bellingham) が、そこで息子がお針子ふぜいのルースと同宿しているのを目撃し、二人の関係を断固切るために息子を強制的に家へ連れ戻してしまうのである。しかし、残されたルースのお腹には、彼との子供が宿っていたのであった。絶望して山に入り自殺寸前のルースを偶然助けたのが、牧師のサースタン・ベンソン (Thurstan Benson) であった。やがて、ベン

スンの姉フェイス (Faith Benson) の助けも得て、ルースは無事に息子レナード (Leonard) を出産することができ、未亡人という触れ込みで町の名士、ブランドショー氏 (Mr. Bradshaw) の家の家庭教師 (ガヴァネス) になることができたのである。平穏な日々が続くかと思われたそのとき、あの自分を誘惑したベリンガムが、この地域の選挙に立候補するために、別の名前を使い、突然ルースの前に現われるのであった。

小説は以上のようにして物語が進展していくが、実際のパスリの場合はどうだったのであろうか。パスリは転落の道を歩みつつも必死の思いで母親に三度手紙を書くが、母親からは何の返事もなく、彼女が最後に行き着いたところは監獄であった。そこで、偶然にも彼女は自分を誘惑した外科医と再会するという出来事が起きるのである。この点で、モデルとなった事件と小説とが類似していることは一目瞭然である。そのうえ、両者が母親の愛情を全く受けられない女性であるという点も共通していることは、作品を理解するにあたり最も重要な手掛かりになるようと思われるのである。そこで本論では、ルースが運命の転変をたどるときに、どのような意識でそれに向かうのかを考察してみたい。つまり、悲劇作品における登場人物の意識を考察することで作者ギャスケルの「墮ちた女」を造形するときの一つの視点が浮かんでくるのではないだろうか。

1. ルースの意識

そもそも作品における「悲劇」とは、我々読者にどのような効果を与えるのだろうか。アリストテレス (Aristotelēs, BC384-322) は、『詩学』の中で「もつともすぐれた悲劇の組みたては、単一なものではなく、複合的なものでなければならず。しかも、その組みたては、おそらくあわれみを引き起こす出来事の再現でなければならない。」(51頁) と述べている。³ つまり多くの小説家は、このようなプロットを展開することで読者に対して物語の悲劇を伝えようとしていると考えることができる。また、齋藤弘平氏は「意識」に関して次のように指摘している。

「移行的」部分及び「意識の流れ」の発想のラディカルな点は、精神=意識の内において、ある特定の「感じ」同士、つまり心的状態同士の関係性が、内向的に発生していると論じる。⁴

*Ruth*の場合、その意識を最も特徴づけていることは何であろうか。それはルースが作中を通して頻繁に行う「涙を流す」という行為に密接なつながりがあると考えられないだろうか。この小説で「涙」に関連する言葉を調べてみると、weepが2回、weepingが5回、tearも5回、そしてtearsという複数形および述語動詞は71回、計83回の頻度を数えることができる。さらに涙を流す人物は、ベンスン牧師が2回、息子レナードも2回、ブランドショー氏が3回であるのに対して、ヒロイン・ルースに対してはtearsが66回も使われているのである。彼女がなぜこれほどまでに涙を流すのか、この意味を探ることが、その意識を考える最もよい方法ではないかと考えられる。

ルースがはじめて涙を見せるのは、メイソンの服飾店でお針子をしていたときである。明日の舞踏会のために夜遅くまで働いているルースの描写に注目して頂きたい。⁵

Ruth pressed her hot forehead against the cold glass, and strained her aching eyes in gazing out on the lovely sky of a winter's night. The impulse was strong upon her to snatch up a shawl, and, wrapping it round her head, have been instantly followed; but now, *Ruth's eyes filled with tears*, and she stood quite still dreaming of the days that were gone. (*Ruth* p.5, italics mine)⁶

ここで涙を流すルースの意識は、ただ過去の記憶だけに浸っている彼女の姿だけである。以前ならあまりの辛さに外へと飛び出したはずの彼女は、今はただ涙を流すしかなく、彼女の陰鬱な性格が仕事場で最も好きな場所にも影響してくるのである。

Ruth's place was the coldest and the darkest in the room, although she liked it the best; she had instinctively chosen it for the sake of the wall opposite to her, on which was a remnant of the beauty of the old drawing-room, which must once have been magnificent, to judge from the faded specimen left. (p.6)

彼女は同僚ともなじめず、女主人からも冷たく扱われているため、彼女が仕事場で一番暗い、一番冷たい場所を好む理由として読者に語られる。しかし、ここで注目をしておかなければいけないことは、ルースが

かつての壯麗な客間にあこがれていることである。彼女の意識には、華やかな上流社会へのあこがれが潜んでおり、同時に自分の惨めな現実に対して涙を流していることが、読者にも容易に理解することができる。そのうえ、ここでは、ルースの将来を不吉に暗示する場面となっていることも想起する必要があろう。

"Oh! how shall I get through five years of these terrible nights! in that close room! and in that oppressive stillness! which lets every sound of the thread be heard as it goes eternally backwards and forwards," sobbed out Ruth, as she threw herself on her bed, without even undressing herself. (p.8, italics mine)

「大きくすすり泣く」sobbed outとあるように、ここではこれから五年間の奉公生活への不安と、永遠に続くなお針子の仕事への嫌悪が、涙となって現われているのである。つまり彼女が、この生活から脱出したいという、叶えられそうにない絶望の涙が、この「すすり泣き」にこめられているのである。同時にここでも、ルースの精神的弱さが暗示されている。このあとルースは同室のジェニー（Jenny）に服を脱がせてもらい、眠りにつくが、「涙」はルースの意識を浄化し、「眠り」は現実の意識を喪失させるという効果を發揮しているのであった。ルースの「涙」は、次の場面でも同様にして描かれている。これは孤児となったルースがメイソン夫人の店で年季奉公することを決められ、彼女を迎えて来た麦芽商人が、その支度に手間取るルースに苛立つ場面である。

[He] drove over for Ruth in his gig; waited while she and the old servant packed up her clothes; and grew very impatient while she ran, with her eyes streaming with tears, round the garden, tearing off in a passion of love whole boughs of favourite China and damask roses, late flowering against the casement-window of what had been her mother's room. (p.38, italics mine)

ここで注目すべきことは、母の存在ではないだろうか。つまり、このときの涙は、彼女が小さな頃亡くした母を思い出した涙である。それはこの直後の文章を見るときわめて重要な意味を含んでいると考えられるだろう。

[T]o remember every look and word of the dear mother, and to moan afresh over the change caused by her death --the first clouding in of Ruth's day of life. (pp.38-9)

ここで、母の喪失がルースに決定的な変化を与えたことが関係しており、さらに次の文章では、植物の根が地中の栄養を求めるように、常に人を愛そうとするルースの性格を伝えている。

But Ruth's loving disposition, continually sending forth fibres in search of nutriment, found no other object for regard among those of her daily life to compensate for the want of natural ties. (p.39, italics mine)

上記の場面では、さらに同僚のジェニーにその愛情が向けられていることにも注意しておいていただきたい点である。「母の喪失」と「人を愛する心」は、フェリシア・ボナパルト（Felicia Bonaparte）も *The Gypsy-Bachelor of Manchester* で述べているようにギャスケル自身とも共通する、ルースの二つの大きな特徴として考えることはできないだろうか。⁷

2. 作者ギャスケルの幼少時代

そもそもギャスケル自身、生後約1年で母を亡くし、父の顔がはっきり弁別できない頃に、チェシャー州ナツツフォードに住む、叔母のハンナ・ラムに預けられ、その養女として幼少時代を過ごした経緯がある。その後、母方の親戚が住むニューキヤッスル・オン・タインに移り、ユニテリアンの牧師として知られたウイリアム・ターナーと、その娘アンとともに生活を始めた。さらに、唯一の兄ジョンは父親と一緒に暮らしていたため、兄妹が離れ離れの生活になるのであった。その後、ギャスケルの父ウイリアム・ステイプンソンは再婚し、後妻との間に生まれた2人の子供も含め、ジョンは5人家族の中で成長することとなる。しかし、肉親の愛情に欠落していたという幼少時代の事実が、エリザベス・ギャスケルの性格を決めた一要素だったかもしれない。すでに指摘しているが、ボナパルトも

Gaskell too valued affection almost above its price. She too was ready to make any sacrifice,

not only, in fact, *for* those who loved her but *so that* she would be loved. She was even willing to steal, if she had to her father's affection.⁸

以上のようなギャスケルの幼少時代の意識が、*Ruth*の作品構成に反映されていることは間違いないことであると個人的に感じるのである。

Love was very precious to Ruth now, as of old time. It was one of the faults of her nature to be ready to make any sacrifices for those who loved her, and to value affection almost above its price. She had yet to learn the lesson, that it is more blessed to love than to be beloved; and, lonely as the impressible years of her youth had been--without parents, without brother or sister--it was, perhaps, no wonder that she clung tenaciously to every symptom of regard, and could not relinquish the love of any one without a pang. (p.248)

この場面は、語り手によって述べられているため、作者自身の意識がそのまま反映されていると考えることができる。つまり、ギャスケルは、全ての人を愛し、全ての人から愛されることを必要とした女性であったことが窺い知ることができる。言い換えると、彼女は社会と調和することが必要であったということにもなるだろう。この点については、ボナパルトも次のように述べている。

She (Gaskell) needed what that image entailed. The fact, however, that the image fulfilled a public ideal as well as not without importance to Gaskell. Gaskell needed love from everyone, she needed everyone's approval. She "clung tenaciously," like Ruth, "to every symptom of regard, and could not relinquish the love of any one."⁹

ヴィクトリア時代の理想の女性像は、社会の愛を得る女性であったということは、作者が1850年に発表した短編、"The Heart of John Middleton"にも書かれている。

[A]nd besides, I would not for worlds have had Nelly put under any obligation to me, which should speck the purity of her love, or dim it by a

mixture of gratitude, - the love that I craved to earn, not for my money, not for my kindness, but for myself.¹⁰

このようにギャスケルは、この作品でも、お金や親切心以上に、まわりの人々の愛情に固執する女性を描いている。これは、すでに触れたようにギャスケルの幼少時代に起因すると考えることができるのでないだろうか。それでは再び*Ruth*に戻り、その涙に与えられたもう一つの意味を探りたいと思う。

3. ルースが愛に溺れる理由

物語の後半、ヘンリー・ベリンガムが、ミスター・ダン (Mr. Donne) と名前を変えて再びルースの前に登場する。そのため、ブラッドショー家の人々に自らの過去を知られ、家庭教師の職を失ったルースが、息子レナードをおいて一人で家を出て行こうとする。しかし、それまで彼女の世話をしてきたベンソン牧師が、ルースを引き止めるのである。

"Nay, Ruth, you must not go. You must not leave us. We cannot do without you. We love you too much." "Love me!" said she, looking at him wistfully. As she looked, *her eyes filled slowly with tears*. It was a good sign, and Mr. Benson took heart to go on. "Yes! Ruth. You know we do. You may have other things to fill up your mind just now, but you know we love you; and nothing can alter our love for you, [...]" (p.354, italics mine)

ルースはこのように、ベンソン牧師から告げられる、彼女は涙を流しながら家を出ることを思いとどまるのであった。しかし、この涙は、先に見た涙とは異なり人から愛されることを知ったときの涙である。彼女は息子レナードを出産するとき、母親としての自覚が芽生え、自己を卑下する涙ではなく、喜びの涙へと変わっていることにも注目すべきである。¹¹ また、この時のルースの姿は、幼少時代に貪欲なまでに周囲の人々の愛情を求めた作者自身の姿と重ねあわせることも可能ではないだろうか。物語はこのあと、エルストンの町に悪疫チフスがはやり、多くの人々が生命を失っているということが報告される。重症患者を隔離病棟に移そうとしても、医者や看護師でさえチフスにかかり、町はパニック状態に陥ってしまう状況である。

これを聞いたルースは、看護師として隔離病棟で働くことを志願する。ルースの命の危険を感じたベンソン牧師は、ここでもルースを引きとめようとするのだが、ルースは彼からの静止の言葉を聞き入れないのである。

She was quite still for a moment, but *her eyes grew full of tears.* At last she said, very softly, with a kind of still solemnity-- "Yes! I have thought, and I have weighed. But through the very midst of all my fears and thoughts I have felt that I must go." (p.425, italics mine)

ルースは息子レナードを気に掛けつつも、ついには隔離病棟へ行くことを決断するが、彼女のこのときの意識は、何よりも病に苦しむ人々に自らの愛情を差し出そうとする意識である。それまでのルースの生きがいは、息子のレナードであったが、彼女は自己を投げ捨て、自己を犠牲にすることで、生きた自分を再度見出そうとするのである。ここには、ヴィクトリア朝時代の女性に求められた「自己放棄」self-renunciationを、肯定する姿が描かれていることにも注目しておきたい。最終章では、かつての恋人、アーサー・ペリンガムがチフスにかかり、その看護をしたルースが、彼を救うことを代償に自らがチフスに感染し、彼女が亡くなったあとのが描かれている。ここで涙を見せるのは、ルースの周りにいた多くの人々であった。ベンソン牧師が、謙虚でやさしかったルースを思い出し "[H]is (Mr. Benson) eyes filling with tears betweenwhiles, as he remembered some fresh proof of the humility and sweetness of her life." (pp.455-6) と、涙に暮れる場面が描かれ、彼が一晩考えた説教 "God shall wipe away all tears from their eyes." (p.457) として読み上げたとき、神が涙を流す一節を聖書から引用した場面は、作者の「涙」に対する興味と関心が読者にも伝わるように描かれているのだ。¹² そして、ルースを解雇したブラッドショー氏も、ルースの墓前で涙を流す場面が、物語の最後として次のように描かれている。

The first time, for years, that he (Mr. Bradshaw) had entered Mr. Benson's house, he came leading and comforting her son-and, for a moment, he could not speak to his old friend, for the sympathy which choked up his voice, and

filled his eyes with tears. THE END. (p.458, italics mine)

この小説の最後の言葉は、「涙」tearsである。しかし、ここで見落としてはならないことにベンソン牧師が引用した聖書の言葉にも「涙」という語が使われているのである。トム ルツ (Lutz, Tom) は、一般に教会牧師が涙を流すときは "[T]he monks are told that crying should always accompany penitence."¹³ であり、また "[T]hat tears are both a gift from God and a tribute to him."¹⁴ と述べている。つまり、ルースの墓前で涙を流している人々は神への偽りのない祈りであり、作者は彼女の罪を浄化する神的なものと結びつけていているのだ。そのため、物語の最後に「涙」という語を多用したのかもしれない。そのうえ、それまでルースの過去を許そうとしなかったブラッドショー氏の涙を最後に描くことで、作者は、さらにルースに対する共感と悲しみ、そしてルースへの愛情を読者の胸の中に掻き立てようとしたことは、容易に想像することができないだろうか。こうして「墮ちた女」ルースは、作者の手によって「聖なる女性」へと変身することができたのである。

4. おわりに

*Ruth*の中で用いられる「涙」を取り上げ、ヒロイン・ルースの意識を中心に考察してきた。この作品には幼少期の作者のファミリー・コンプレックスとも思える箇所が、随所に見いだされることも確認することができた。同時に「涙」を通して、読者の「共感と悲しみ」を誘う、作者の常套的な小説手法も確認することができた。しかし、両親、兄弟との関係を断たれたギャスケルが、このような手段で、自分が得られなかった愛情を、この作品を通して回復しようとしたとは、改めてこの作品を見直すきっかけになったのではないかと思う。「墮ちた女」が「家庭の天使」に変貌するということは、当時としては、現実にはありえなかったのである。しかし、この小説でルースを最後に「家庭の天使」に仕立てたことは、もしかしたら安易な手法と考えができるかもしれない。しかしながら、ギャスケルの出生を考えたとき、作中に「涙」を描くことで、読者の共感のみならず、愛情をも手に入れようとした、作者の切ない姿が少なからず浮かんでくることができる。そして、この小説はそれに十分成功した筆力の賜物である。

*本稿は、日本ギャスケル協会第23回例会（2011年6月4日、於日本大学法学部）における研究発表「*Ruth*に見る「意識」が直接与えるもの—ヒロイン・ルースを例にして—」に大幅な加筆修正を施したものである。

注

1. 松岡光治編『ギャスケル文学』（東京：英宝社、2001年）87-111頁の中で波多野葉子氏は、『ルース』執筆の動機は、娼婦救済運動に関心があったギャスケルが、わずか16歳のバシリに出会い、彼女からの影響と救済を求めて執筆したのではないかと見解を述べている。その後、バシリはディケンズの力を借りてオーストラリアへ移住させている。
2. 松村昌家「お針子の生と死」、『十九世紀ロンドン生活の光と影』152-169頁を参照。
3. 『詩学』（松木仁助・岡道男訳：岩波文庫、1997年）の中でアリストテレスは、複雑な話のプロットでなければ、読者にとって強い共感と憐みを引き出すことができないと指摘している。つまり本作品においては、社会の中で女性が転落の人生とその後の姿を描くことで読者へ深い同情と共感を与えていていると考えられる。
4. 斎藤弘平、「『意識の流れ』のプラグマティズム—ウイリアム・ジェームズの心理学における主観の原理—」、『英文学思潮』（青山学院大学英文学会、2007年）179-205頁を参照。
5. 斎藤弘平は、「『意識の流れ』のプラグマティズム—ウイリアム・ジェームズの心理学における主観の原理—」の中で、「主観及び自己の「利害」「目的」のためにそれぞれ個別の心的プロセスが存在する、という原理に鑑みれば、実はそれほど不都合なことではなく、寧ろその原理を更に自然科学として推進させられる契機となる」と指摘している。
6. 以下の引用はGaskell, Elizabeth. *Ruth*. Oxford: Oxford UP, 2008. から。
7. ボナパルトは、*The Gypsy Bachelor of Manchester*. -The life of Mrs. Gaskell's Demon-（Virginia: Virginia UP, 1998）の中で、“Gaskell needed to be loved.” (p.33) として、ギャスケルにとって愛の必要性を強く主張している。
8. Bonaparte, Felicia. *The Gypsy Bachelor of Manchester*. -The life of Mrs. Gaskell's Demon-

(p.33) 引用中の斜字体表記及び記号は全て原文のままである。

9. ibid. pp.45-6.
10. “*The Heart of John Middleton*” (*The works of Mrs. Gaskell*, NY; AMS P, 1972.) pp.392-3.
11. ルツは “*Crying. The Natural & Cultural History of Tears*. (“NY: W.W.Norton & CP, 1990.) の中で、19世紀後半の小説には多くの登場人物たちが涙を流す場面が登場している。作家は、その登場人物の涙によって、多くの読者や聞き手を獲得し、その後、読者の利己的堕落を浄化するのに役立ったことを指摘している。 pp.52-3 要約。
12. “And God shall wipe away all tears from their eyes.” の一節は、Revelation 21:4からの引用である。おそらく、ユニテリアン派の牧師妻であるギャスケルは、作品執筆中にマグダラのマリア同様に罪の穢れを浄化する場面を聖書から引用することを考えていたのだろう。
13. Lutz, Tom. “*Crying. The Natural & Cultural History of Tears*. P.47
14. ibid. p.46

Works consulted

- Blackmore, Susan. *Consciousness An Introduction*. London: Hodder Education, 2010.
- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy Bachelor of Manchester*. -The life of Mrs. Gaskell's Demon- Virginia: Virginia UP, 1998.
- Chapple, John. and Shelston, Alan. *Further Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 2003.
- Dennett, C. Daniel. *Consciousness Explained*. NY: Back Bay Books, 1992.
- Gaskell, Elizabeth. *Ruth*. Oxford: Oxford UP, 2008.
- . “*The Heart of John Middleton*” *The works of Mrs. Gaskell*, NY; AMS P, 1972.
- Gennaro, J. Recco. “Counsciousness and Concepts. An Introductory Essay.”, *Journal of Consciousness Studies*, 14, No.9-10, 2007, pp.1-19
- Tucker, Roberta. “Disorientation, Reorientation, A Compulsion to Explain.”, *Journal of Consciousness Studies*, 11, No.5-6, 2004, pp.5-20
- Uglow, Jenney. Elizabeth Gaskell. London: Faber and Faber, 1999.